

小林光夫, 武市正人, 鈴木卓治 著

“UNIX ワークステーション入門”

東京大学出版会, B 5 判, 326 p., ¥ 3,296, 1992

近年, UNIX WS (ワークステーション) が世の中に広まってきている. しかし, 一般ユーザ, 特に初心者が UNIX WS を利用するに際しては, さまざまな知識が必要となり, ユーザは熟練ユーザに尋ねるなり, それぞれの処理や目的に応じた参考書を何冊も読むなりする必要があった. UNIX WS について説明している書籍を目にすることもあがるが, それらは, 概して専門的すぎるが多かった.

本書は UNIX WS の幅広い利用方法を初心者視点に立って説明してあり, さらに進んだ内容に対しては参考書などを紹介するように心配りしている. 著者がまえがきでも述べているように文系・理系を問わず, 高校, 高専, 大学などにおける初歩の情報処理教育のための教科書・参考書として, また, 仕事で UNIX WS を利用する初心者が UNIX WS の利用の仕方を知り, 活用するための入門書・手引書として利用できるものとなっている.

本書はおよそ 300 ページからなり, 12 の章から構成されている. 0 章では, はじめて利用するユーザに対して, UNIX WS とはどのようなものなのかを説明している. 初心者以外は読み飛ばしてよい. 1 章では, UNIX WS へのログインやログアウトの手順について, コンソールなどの端末からと, ウィンドウシステムが動作してログインのためのウィンドウが開いている状態からとの 2 とおりについて説明している. 読者は自分の状態にあった方を読めばよい. 2 章では, 文書データの編集に必要な知識を習得することを目標としており, エディタの種類によって 2 つの章 (2V

章, 2E 章) にわかれている. 2V 章では vi エディタの操作について, 2E 章では emacs エディタの操作について, それぞれ実際の例を示して説明している. 3, 4 章では, UNIX でのデータ処理の際に用いる grep, sort などのコマンドと UNIX のファイル管理を説明している. 5 章では, sed や awk を利用しての文書データの加工, 編集の方法を説明している. また, 文書データを清書する方法として LaTeX を紹介している. 6 章では, 主に C 言語でのプログラミングとそのデバッグの方法, バージョン管理の方法を説明している. 7 章では, X ウィンドウシステムに関する操作と日本語入力のための操作について説明しており, コマンドの実行情例なども多く示している. 8 章では, 電子メール, 電子掲示板の利用方法を説明するために ucbmail や rn の使用例を示している. また, 複数の UNIX WS を活用する方法を説明するために telnet, rlogin の使用例を示している. さらに, パソコンと UNIX WS との接続方法についても説明している. 9 章では, 環境変数の設定により自分自身の環境のカスタマイズ方法やよく用いるコマンドを組み合わせた手続き処理のコマンドの作成方法などを説明している. 最後の α 章では, 電源のオン/オフなどの管理者の仕事について触れている. 0 章~4 章では, 基本的な事項が整理して書かれてあるのでじっくりと読むことを初心者には奨める. 5 章~9 章ではそれぞれの目的に対応した内容となっているので必要に応じて読めばよい.

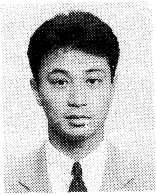
全体をとおして, 図や表を多く用いて説明してあり, できるかぎり実際に読者が遭遇するような状況を想定して書いている. したがって, 読者が本書を傍らに置いて UNIX WS を利用するのに適したものとなっている. また, 本書を順に読み進むことによって UNIX WS を利用するための基本的な知識を習得することができる. さらに, 目次, 索引が工夫してあり, 読者の興味のある事柄がどこに記述されているかを知ることが容易に行えるようになっているので手引書としての効果も大きい.

少し気になる点をあげると, 著者はできるだけ日本語を用いてカタカナ用語の使用を避けている. 例えば, コマンドという用語をはじめて説明する場合に「指令 (command, コマンド)」という

ように表現してあり、以降は「指令」という言葉を用いている。しかし、読者が知識を得て先に進んでいく中でこれはかえって余計な混乱を招くことになると思われる。最初の説明で「コマンド(指令)」と表現して以降では「コマンド」という言葉を用いるなどして、UNIX WS のユーザの間で一般に使われている言葉を用いて説明する方がよいように思う。

本書はあくまでも入門書であり、それぞれの分野においてさらに深い知識を求める場合は巻末に示されているような文献を読む必要がある。

しかし、本書のように UNIX WS の多様な利用目的(プログラミング、文書作成、文書加工、ネットワーク通信など)に応じて、かつ、幅広い範囲の読者のことを考慮して説明している入門書は少ない。そういった意味でも本書は初心者にとっては UNIX WS への導入として有効なものである。



多田 信彦

1965年生。1989年京都大学工学部数理工学科卒業。同年松下電器産業(株)入社。現在、同社情報システム研究所所属、コンピュータネットワーク上でのコミュニケーション環境や情報の有効な共有化に関する研究開発をおこなっている。

阪田史郎 著

ST シリーズ

“マルチメディアとネットワークによるグループウェアの実現技術”

ソフト・リサーチ・センター、B 5判、249 p.,
¥ 3,800, 1992

グループウェアあるいは CSCW (Computer Supported Cooperative Work) という用語が近年盛んに聞かれるようになり、一種のブームを巻き起こしている。従来のシステムは人と計算機のコミュニケーションを支援することに重点が置かれているのに対し、グループ間の人と人のコミュニケーションを支援するシステムにニーズと関心が高まってきており、大学の研究機関ばかりでなく、次世代の OA 機器への期待から企業においても数多くの研究開発が行われている。

グループウェアにはさまざまな種類があり、言葉の定義自体も曖昧であり、それぞれの人が、それぞれの立場で用いている場合が多い。特徴付ける言葉(キーワード)としては、Communication, Collaboration, Coordination などがある。MCC の Ellis による定義¹⁾ 通常の vefevance 形では、「共通の仕事や目的を持って働く利用者のグループを支援し、共有作業環境へのインタフェースを提供するコンピュータシステム」である。本書では、グループウェアと CSCW をほぼ同義語ととらえ、特に CS すなわち、コンピュータによる支援の立場からグループウェアを実現するための技術を広範囲にわたって解説している。

副題にあるようにグループウェアを実現する技術はマルチメディアとネットワークであると本書ではとらえている。単なる動画のたれ流しや CD-ROM や動画圧縮ボードを搭載した程度のものにマルチメディアという名前を付けて商品としたり、ネットワークを使ってメールやスケジュール管理を行うソフトをグループウェアと称している製品もあるが、本書ではそのような安易な言葉の使われ方に対しても批判が述べられている。

本書は全体で6章から構成されており、第3章まではグループウェアが誕生してから今日のように注目されるに至るまでの背景や言葉の定義、学会の動向、グループウェアの特性による分類などを述べた後、Xerox PARC の Colab, MCC の gIBIS などの、先駆となった代表的な研究事例を紹介している。

第4章「グループウェアを実現する技術」は、本書の目的であり、全体の約半分の頁を割いている。そこでは、マルチメディア化とネットワーク化の2つの軸でとらえ、次の6つの技術について解説している。(1)「マルチメディア技術」では、動画や音声などの実時間メディアをコンピュータで直接扱う際の問題点について考察した後、作成/編集と蓄積/検索と通信の3つのメディア処理技術、および標準化動向について紹介している。(2)「情報ネットワーク技術」では、ISDN や LAN などの通信技術とプロトコル技術などについて述べている。(3)「システム構築技術」では、マルチメディア OS や分散 OS などの基本ソフトや、その上のグループウェア・プラットフォームのためのシステム・ソフト、ヒューマ